



福島県立医科大学



学長 菊地 臣一

きくち・しんいち／1946年生まれ。71年福島県立医科大学卒業、90年福島県立医科大学整形外科学講座教授、2004年医学部長、06年附属病院院長、08年第16代学長就任。2000年国際腫瘍学会（第27回）Volvo Award受賞、03年同学会（第30回）ISSLS Prize受賞、同年スウェーデン・イヨテポリ大学名誉医学博士、06年福島県医師派遣調整監、07年日本脊椎脊髄病学会理事長。



福島県立医科大学は医学部と看護学部を持つ特色ある大学として、保健医療福祉に貢献する優れた医療人を広く県内外に輩出してきました。

国民、県民の安全・安心に直結するこの分野の重要性がますます高まる中でも、本学は「ひとのいのちを尊ぶ医療人の育成」や「全人的・統合的な医療の提供」をその理念として、常に「人」を教育、研究、診療の中心に据えることで志の高い学生や教職員が集う魅力的な大学へとさらに成長を続けています。

ヒューマンスケールの本学は、医学部、看護学部等組織間の連携が円滑で構成員相互のコミュニケーションも活発です。そうした特性を生かし、医学部と附属病院の各組織が一丸となって「遺伝子発現解析技術を活用した個別がん医

療の実現と抗がん剤開発の加速」の橋渡し研究に取り組んでいます。本学だからこそできる基礎的研究と臨床研究の垣根を越えた画期的な研究活動として、その成果が学内外から高い評価を得ています。

確固たる礎を持つ 時代の流れに先駆ける

県内唯一の医科大学として、県内医療機関を直接支援するための独自のシステム（〇四年）や国内でも先駆的な「庭医養成組織」「地域・家庭医療部」の設置（〇六年）など、常に一步先を見据えた地域医療政策も県と密接に連携して展開しています。今も、県立病院を大学附属病院として統合整備するとい

う、全国にも例を見ない計画を進めています。社会がどんなに激しく変化しようとも、変わることはない普遍性を堅持しながら、進取の精神を持って柔軟に対応していく、それが福島県立医科大学の姿です。

崩壊寸前の地域医療を守るための新たな挑戦

全国的に広がる医師不足の問題は福島県でも例外ではなく、県立病院は改革を余儀なくされています。その一環として会津の県立二病院の廃止と新病院の建設計画が進められてきましたが、医師の確保の難しさなどから福島県立医科大学の附属病院として整備してほしいと県から要請がありました。

地域の公立病院を大学が引き受けるという前例のない取組みです。開院予定は平成二十四年度。現在、大学附属病院として、診療だけでなく教育研究機能を有する施設へと整備計画を見直しています。やはり医師の確保が最大の課題です。

そこで、本学は、この新しい病院に来ていただく大学教員としての医師を、医師の給与水準で迎えることにしました。また、定年制も事実上撤廃することで年齢を問わず人材を求めます。教職員の意欲向上のためのインセンティブシステム導入も含めて、国公立の大学がいまだチャレンジしたことのない新しい領域への挑戦がまた始まりました。

NEWS & TOPICS